
S t o r y

鳩梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S t o r y

【Nコード】

N 1 5 5 0 B

【作者名】

鳩梨

【あらすじ】

この物語を読む上で必ず、このことを心得ていて下さい。『この物語は完結しません。それこそが完結なのです。この物語は時間、登場人物、そのどれもが同一であると同時に別物です。この物語には救いはありません』以上のことを理解しましたか？それでは、一時的劇を。

十字架

それはある日のことでした。

その日は雲一つない晴れ晴れとしたとてもいい天気でした。

さざめく木々の音。気持ちよさそうに囀る小鳥達。それはこの日限りの幻想曲。その曲に誘われるようにわたしは森へと入っていました。

蒼穹を遮る青々とした木々の枝葉。その隙間から零れ煌く日の光。お家の近くの森だというのに、そこはまるでお話の世界のようでした。

うれしくなって、とても気持ちよくて、わたしは森の奥にある泉まで行ってみることにしました。

泉に近づくと、それまでは二重唱で奏でられていた幻想曲は、泉のせせらぎも加わり三重唱へと変わっていきました。曲を耳にしなから靴を脱ぎ泉にそっと足を入れます。

「……きもちい」

夏にはまだ早いけれど、泉の冷たさはとても心地のいいものでした。

泉の脇にあるちょうどいい大きさの石に腰掛けると、そのまましばらくわたしは、目を瞑って三重唱で奏でられる幻想曲に耳を傾けていました。耳に優しい、時間を忘れることのできる曲です。

どれくらいそうしていたでしょう。かさり、と音がしました。誰か来たのかしら、とそちらへ目を向けるとそこにはとても大きな何かがいました。

わたしは息を飲みました。3mはあろうかという巨躯。木漏れ日の差す日中であってそだけ夜闇を思わせる黒い体毛。禍々しく輝く金の双眸。目の前に居るのは、圧倒的な恐怖の顕現がそこに居ま

した。

「あ、ああ……………」

口からは息なのか何なのか判らないものが零れでる。震える身体。逃げなければ。そう思っても身体はピクリとも動くことがかないません。

いつしか幻想曲は鳴り止み、森を埋め尽くす静寂は葬送曲をおもわせました。

「……………」

目の前のそれが静寂を蹂躪するほどの禍々しい雄叫びを上げました。

それを聞いただけでわたしは泣き叫びたくなりました。けれどわたしは只震えるばかり。

ゆつくりと、巨軀を揺らしながらそれは近づいてきます。

嗚呼、わたしはここで死んでしまうのだろうか。

恐怖に怯えながらも、わたしはそんなことをぼんやりと考えることができませんでした。

大木を思わせる大きさの腕が振り下ろされる。瞬きをするほどの時間でわたしは紙切れのように引き裂かれるでしょう。

「――何してるんだ!!」

その声が聞こえたと思った瞬間、わたしは泉の中に横たわっていました。どうなったのかよく判らないでいると、わたしを庇うようにして黒いソレと対峙する誰かの背中が見えました。

「早く逃げろ!!」

力強い低い声でした。彼がわたしを突き飛ばして黒いソレから庇ってくれたのだと判りました。

彼は弓で大木のような腕を受け止めていました。弓からはギンギシと悲鳴が聞こえてきます。このままでは弓は壊れてしまい彼がわたしの代わりに引き裂かれてしまう。そう思っても私はどうしてか、彼ならそうならないと確信していたものを感じていました。

刹那、夜闇のような巨軀に斜めに一筋の銀光が走りました。そう

思っている間にも一筋、もう一筋と銀光が夜闇の上を走り廻り、踊りつづけます。

銀光の狂舞が止まると静かに、黒い巨躯が傾ぎ、霧散しました。そこにはまるで最初から何もいなかったかのよう。まるで悪い夢でも見ていたのではないのでしょうか。

彼の手には弓のほかに銀の短剣が握られていました。嗚呼、これがさっきの狂舞の正体なんだ。

「――怪我はないか？」

一つ大きく深呼吸すると、彼はわたしにそう尋ねてきました。赤銅色の髪、青い双眸。私の大好きな色。

「もしかして、どこかに怪我をつ?!」

わたしが黙っていると彼はわたしが怪我を負ったと思ったのでしよう、目に見えて慌てました。その驚き方があまりにも真剣なのでわたしはとっさに首を振ることしかできませんでした。彼の驚愕には鬼気迫るものがあつたのです。

「そうか……。よかった」

彼は安堵の溜め息をつくと今度は顔を赤らめて今度はうろたえだしました。わたしを助けたり、黒い何かと闘ったり、心配したり、慌てたり、忙しい人だな。と思うと知らず笑みが零れました。

わたしがクスクスと笑んでいると彼は後ろを向き、外套を外すとわたしに投げてきました。わたしはそれを濡れないように受け取りました。

「あー、えっと、それで身体隠したほうが、いいよ」

彼は後ろを向いたまま、やや上ずった声でそう言いました。その言葉の意味がいまいち判らずとりあえず自分の体を見て――恥ずかしくなりました。

泉の水で濡れた服の上からはわたしの身体が透けて見えていたのです。

彼のいった言葉の意味が判ると同時、彼の外套で身体を隠しました。

「檻樓だけど、許してくれ」

わたしは恥ずかしさのあまり、そう言った彼の顔がまともに見れませんでした。彼も恥ずかしいらしく、どこかあらぬほうを向いていました。

その後、わたしは怪我をしていた彼を家に来るよう勧めました。彼は遠慮していましたが怪我をしたのはきつと私のせいなのです。それに助けていただいた御礼もせねばなりません。有無を言わず無理矢理に彼を家に連れて行きました。

「少し、待っていてくださいね」

わたしはそう言い置いて寝室に戻りました。濡れた服を着替えなければなりません。

着替え終えて傷薬と包帯をもって寝室を出ると、彼は椅子にもたれて寝ていました。家に来る途中で聞いた話では、ずっとあの黒い巨軀——マモノを追いかけていたといいます。疲れているのだろうと思い、わたしは彼を起こさないように気をつけながら治療しました。腕にはわたしを助けた傷であろう四本の裂傷ができていました。傷薬を塗っている間も彼の寝息は安らかでした。

包帯を巻き終えると、彼に毛布を掛けてあげ、わたしは静かに家を出て買い物に出かけました。

買い物から帰ってきてても彼はまだ寝ていました。日はもう傾いています。きつと、寝ずにずっと追いつづけて、疲れ果てているのでしょう。わたしはそのまま夕食の準備に取り掛かります。

夕食が出来上がり、さすがにそろそろ彼を起こそうとしますが彼は中々起きてくれません。しかたないので彼はそのまま寝かしてあげ、わたしは一人で少しはやい夕食を取ります。

夕食を食べ終わっても彼は起きません。わたしは不安になってきました。あまりにもひどい傷だとソレが原因で病気になることがあるという話を思い出しました。

彼の額に手を置いてみるとすごい熱さでした。寝息はどこまでも安らかなのに汗をかきすごい熱なのです。

彼をわたしのベッドに寝かせ、タオルを水でぬらし額に置くと、わたしは家を飛び出てお医者様のところへと行きます。

お医者様に事情を話し家で彼を見てもらいました。

「大丈夫なんでしょうか……」

わたしは心配になりました。お医者様はとても難しそうな顔をしています。

熱を測り、心拍を見、傷を見ると、表情は驚愕に変わりました。

「どうしたんですか」

「こ、この傷は――」

わたしはこの傷の経緯を話しました。

話を聞き終えたお医者様は青い顔を見ると家を飛び出しました。

わたしは何がなんだかわからずにいました。そうしている間にも彼の熱は上がっていく一方です。

お医者様が包帯を外してそのままの傷口に包帯を巻きなおそうとした時、わたしはそれに気づきました。

――嗚呼、お医者様はこれを見て飛び出したんだな。

彼の傷口は黒く変色していたのです。いいえ、傷口だけでなく傷口の周りの肌の色も。それは夜闇よりも暗い黒。あのマモノと同じ色です。

わたしはある話を思い出しました。

――そのケモノに傷を負わされた者は呪いが全身を駆け廻り、やがては同じケモノに成り果てるだろう……。

あのマモノはこの古い伝承に伝わるケモノなのだろう。

きっと、もうすぐあのお医者様がこのことを言いふらしてしまうだろう。そうなればこの人は必ず殺されてしまう。

――そんなこと……

わたしは傷口に包帯を巻くと急いで彼を起こしにかかりました。頬を叩き、耳元で大きく呼びかけ、揺さぶると彼はようやく起き

てくれました。

「早く逃げましょう。ここには危険です」

わたしの必死さに最初怪訝そうにしましたが、わたしは彼を
急ぎ立てすぐに家を出ました。

向こうのほうからは幾つかの明かりが見えます。それは私の家のほ
うへと近づいてきています。

急がなければ。

私たちは森の中へと逃げ込みました。

夜の暗い森の中をわずかな月明かりを頼りに走ります。

泉のところまで来ると後ろを振り返り、誰も着ていないことを確
認して休憩することにしました。彼は熱があり本調子ではないし、
わたしは走ることになれていないのです。

「ここまで、だね」

唐突に彼がそう言いました。

「え？」

彼は下を向いて必死に息を整えているのかと思いました。しかし

――、

「キミは……、早く……帰るんだ……」

「何を言ってるの？ そんなことしたら、貴方は殺されてしまう」

「僕はもう、――なんだ……」

なに？ なんて言ったの？ わたしには彼が言ったことが理解できな
かった。

「――っ!!」

彼はいきなり天を仰ぐと腕を掻き耑りだしました。そこはあの傷
のある場所。

わたしは息を飲みました。彼の腕はもう、人間のものではなかつ
たのです。

「……ハヤ、ク……ニゲロ……」

たったそれだけのことを言うのも彼は辛そうでした。

彼の双眸はきれいな青色から、禍々しい金色へと変色していまし

た。それはあのマモノと同じ色です。

「ああ——……」

わたしはまだ彼に何もお返しをしていないのに。

あの時私がいなければ。

わたしがもつと早く殺されていたのなら。

とりとめもない考えが頭を廻り続けます。

そうしている間にも彼の腕は太木のような太さへと変貌し、瞳からは理性の色が消えていつてしまいます……。

「タノ——、ニゲ、テ……」

それでも彼はただ、わたしの身を案じて逃げろと言うのです。

その自らのことよりもわたしの身を案じてくれる彼の優しさに、

「わたしは、あなたに助けにいただきました」

いつから流れていたのか、わたしの目には涙が流れていました。

「わたしのせいで、あなたは呪われてしまった」

ゆっくりと彼に近づく。

「わたしは、貴方に、まだ御礼すら言っていないませんでした」

彼がその変貌した腕を振るえばわたしはひとたまりもないでしょう。
う。

「わたしは——」

彼の熱くなった頬に手をやります。彼の唇に私の唇をそっと重ねる。

「——貴方のことを本当に愛しています」

彼の腰から銀の短剣を抜く。

彼にはもう、人間としての意識がないのかもしれない。

「わたしを、恨んでください」

短剣を、彼の、胸に、刺す。何度も。何度も。何度も何度も何度も何度も。唯……息絶えるまで……

最期に彼は、「ありがとう、ごめんね」と言いました。

それからしばらく、村はある話題でもちきりになった。

呪いにかかった青年と、その恋人の少女の消息。

森の泉の枯渇と、そこに落ちていた青年の愛用していた銀の短剣。
いつのまにか焼失していた少女の家。

無残に引き裂かれた村医者の変死体。

青天の日の夜に聞こえる獣らしき雄叫び。

そして――……………

春の訪れ、その前の季節

——はやく、早く帰らなければ。

降りしきる雨の中、男は馬に鞭を打ち走る。

思うは自らの愛する唯一の娘。早くに亡くなった妻との間にできた、たった一人の愛しい娘。

——急がなければ。急いで帰らなければ。

今は走る馬の遅さが憎らしい。

解かってはいるのだ。決してこの馬は遅くない。遅いと感じるのは早く早く、急がなければと思う男の気持ちの現れ。この豪雨の中、地面はぬかるみ、たとえ馬と言えど走るのには足場が悪すぎるだろう。それでもぬかるみに足を取られることなく、この決して短くない距離をひた走るこの馬は、とてもよくやってくれている。

嗚呼、それでも——。

◆ 一月の雨の日

「お帰りなさい。お父様」

「ああ、ただいま。遅くなってしまったね」

「そんなことはないわ。この雨ですもの」

男が家に帰り着くと娘が笑顔で出迎えてくれた。この雨の中を帰ってきた男は雨よけの外套も空しくびしょ濡れだ。娘は用意していたタオルを男に手渡す。

よく気の利く娘に男は礼を言い、微笑む。その笑みをうけて娘も微笑を浮かべる。

今夜の夕食はシチューだ。裕福とは言えないが、娘の作ってくれたシチューにはそれでも肉もちゃんと入った、温かく美味しい夕食。「どうかしら？あまり上手にはできなかったのだけれど」

「ああ、美味しいよ。冷えた体が温まる」

男の言葉に満足そうに微笑むと娘もシチューを口に運ぶ。

カチャカチャと、食器の音だけが夕食の席で鳴る。会話はない。食事中には会話をしないのが男と娘のいつもの夕食の姿。

食事が終わると男が食器を洗い、娘はそんな男の姿をただ、じっと見詰める。

就寝前には必ず、男と娘はある話をする。

「ねえ、お父様」

「なんだい」

「お母様は今日何を食べたのかしら」

「私たちは今日、シチューだったからね。きっとお母さんも、シチューを食べていたさ」

「わたしね。――に行ったら、お母様にわたしの作った料理を食べてもらおうの」

娘は楽しそうに言う。

「そしてね。お母様の料理も食べさせてもらうの。そしてね。お母様と一緒に料理を作るの。そうしたら、お父様にうんと美味しいモノを食べさせてあげる」

「それは楽しみだ」

「うふふ」

楽しそうな談笑。

「さあ、もうお眠り。今日はもう遅い」

「ええ、おやすみなさい。お父様」

「ああ、おやすみ」

娘が寝付くを見ると、そっと扉を開け、部屋を出る。夜風が窓を叩いた。

降り止まない雨が窓を打つ。

◆二月の降り止まぬ雨の日。

今日も雨が降っている。

男はいつも決まった時間に目を覚ます。窓の外を見、今日も雨が降っているな、と感想を持つ。

ベッドから降りるとき男は少し足を踏み外した。自分ももう年かな、と苦笑する。着替え、娘を心配させぬようにと笑顔で自室を出る。

「おはようございます。お父様」

「ああ、おはよう」

食卓に朝食を用意しながら、娘は起きてきた男に微笑み声を投げる。

娘はいつも男より早く起きる。男がもう少し遅くてもいいのだよ、と言っても娘は、いつも働いているお父様のために、と男より早く起き朝食を用意している。

朝食を食べ終わると男は外套を着、馬に乗ると町へと働きに出かける。

娘は男を見送ると食器を洗い、部屋で本を読む。

娘はふと顔を上げると目を閉じ、物思いにふける。

娘は、そのままゆっくりと眠りについた。

男が家に帰ると、おかしなことに今日は娘の出迎えがなかった。

娘に何かあったのではないだろうか。

男はそう思うと濡れて冷えた身体をそのままに娘の部屋へと飛び込んだ。

娘はベッドの上で寝ていた。読みかけの本がそのまま置かれていた。きつと本を読んでいる途中で寝てしまったのだろう。そう思うと一気に気が抜けた。こんなことは今までになかったが、いつも私より早く起きているのだ。こんなこともあるだろう。と、しばらく寝かしておいてやることにした。幸いにも寝息は安らかだ。

夕食の準備が終わっても起きてこない娘をそろそろ起こしてやろうと、娘のところへと行くと何か様子がおかしいことに気付く。

安らかだった寝息がどこか荒い。寝相の良い娘の布団が床に落ちている。長い髪はベッドの上に広がり、汗で濡れた額に張り付いている。

娘の額に手をやるとひどい熱だった。薬ビンとコップを持ち、コップに水を入れ、急いでタオルを水で濡らし、娘の額に置く。

娘がうつすらと目を開いた。

「……お父、様？……いけない。夕食の準備を――」

「いいから寝てなさい」

起き上がろうとする娘をおさえベッドに横にさせる。

「ごめんなさい……お父様」

「いいから、これを飲んで寝ていなさい」

薬ビンから薬を出しコップを渡す。

娘は薬を飲むとゆっくりと眠りについた。

娘が寝たのを確認すると、男は急いで外に飛び出た。薬ビンの中にはもう、薬がほとんどない。今までずっと体調がよさそうだったからてつきり良くなったと思ったのに。

馬を駆る。医者 of 所までは遠い。急がなければ。明かりのない夜道。横殴りの風。往く手を遮る雨。それでも男は疾風のように馬を駆る。

なぜすぐに気付かなかった！！尽きることの無い悔恨が、脳裏を廻り、心臓を鷲掴む。

医者を家につれてくると娘をすぐ診てもらう。注射と、薬を処方してもらった。

男は寝ずに娘を看病した。

寝息が荒い。熱がひどい。

男の脳裏に残酷な想像がよぎる。必死にそれを振り払う。

——ああ、神よ。どうして貴方はこうも残酷な仕打ちを平然とするのです。

神よ。これも貴方の試練なのですか？

ああ、神よ。娘を。私はどうなってもいい。だから、どうか

◆ようやくの晴れの日。その夜。それは碎けた現実。救いは何処

「それでね、お父様」

明るい娘の声が聞こえる。

「——とてもキレイなお花がね」

娘が口を開くたび白い息が漏れる。

「——小鳥達が歌うの。お父様もきつと気に入るわ」

薄暗い部屋。虚ろな月明かりの照らすなか、楽しそうな談笑。

「——ふふ。お母様と私が作るんだもの。とても美味しいに決まってるわ」

痩せこけた娘。薄汚い部屋。小さな咳。

冷たい部屋。檻褻い布団。——鼻を刺す異臭。

——娘にはもう解からないのだろう。そこにいる男の、腐敗

していくだけの身体が、……何を意味するのか。その現実が……
……

近隣の住民がある家から強烈な腐敗臭がしたことに気づき、その家を訪れるとそこには椅子に座る腐って溶けた男の屍体があった。

腐敗臭は家にそのものにこびれ付き、どうやっても落ちることはなかった。

男は教会により葬られ、男の家は焼くことになった。

男の家の後地にはそれ以来、建物が建つ事はなかった。

それから数年して、その町は戦禍により焼け地となった。

そこに今あるのは——……

Convert

深夜。空では白い月が狂ったように笑っている。付き従う星々もまた月につられたように哄笑を挙げている。

——嗚呼、いい夜。

そんな夜空を見上げながら、男はうっすらと、艶やかな笑みを浮かべた。

最近巷を賑わせている事件がある。

10代の少年少女たちが立て続けに、この3日間だけで行方不明となっているのだ。

少年達は皆友人や親、誰かと一緒にいたにもかかわらず、ふとした瞬間から、あるいは別れたその後から一切詳細がわかっていない。警察は当初この事件を少年達の遊び歩きのようなものとして一切重視していなかった。だが、事件初日から3日間で7人の少年少女たちが行方不明となった。中には12歳になったばかりの幼い少女まで含まれている。父親がふと目を離れた一瞬のうちに姿を消していたのだ。

様々な憶測が飛び交うも事件は解決の兆しは見えなかった。

ゴシップ好きの記者達は警察の職務怠慢と紙面を躍らせ、あるいは連続誘拐事件の犯人像を好き勝手に述べ、事件の混乱に拍車をかけた。

そのため、今この街では夜に一人歩きをする者は皆無と言っているほどにいない。

だが、それでも自分は絶対に事件に会うことは無いと思い込んでいるのか、一人歩きをする者は極少数いた。

それはあるいは自らが犯人だとわかっているからかもしれない。

——彼、あるいは彼女は今宵も生贄の羊を探す。

路地裏を一人軽やかな足取りで歩くのは女性。

過度でない程度の、それでも豪奢と言ってもいいほどのドレスを着た女性は鼻歌を歌い上機嫌に月を見上げながら歩く。そうしていると、女性は道を間違えたのだろうか。不良たちの溜まり場たる一面にたどり着いた。

げらげらと下品に笑いながら話をしていた四人の少年達が女性に気付いた。

「おい」「あ?」「ヒュ」「へえ」

現れた上玉と言える女性に少年達はそれぞれに声を上げる。女性はと言うと、最初「あら?」と言った風な表情をした後、下卑た笑みを浮かべる少年達に息を飲み。一步、後退った。

「へーイ、どうしたの彼女?」

「俺らと遊ぶ?」

「結構金もってそうじゃね?」

「おいおい、どうするよ」

少年達が嗜虐的な下卑た笑みを浮かべながらじりじりと、女性にじり寄る。

女性は恐怖で顔を彩ると、後ろを向き一目散に逃げ出した。

当然、せっかくの上玉を逃がすわけも無く少年達は追いかけた。

走る女性。後ろからは少年達の下品な声が投げかけられてくる。

わずかな月明かりと、覚えている道の記憶だけを頼りに路地裏を走る女性。もうすこし走れば十字路に差し掛かる。女性の顔には先ほどまでの恐怖に怯えた表情が嘘かのように凄烈な笑顔が張り付いていた。

十字路を曲がると手ごろな暗がりにも身を隠す。そうして少年が追いついてくるのをじっと待つ。そう時間も経たずに足音が一つやってきた。女性は満面の笑みを浮かべゆっくりと暗がりから身を出すと、驚いている少年に抱きつき、熱い接吻をした。

女性の唇からは朱い雫がひとつ、零れ落ちた。

連続誘拐事件から四日目。今度は3人の不良少年達の話がわからなくなった。その仲間で、唯一無事だった少年は警察に駆け込むや否や、自分の見たことの顛末を話した。少年は錯乱しているようで、言っていることはおよそ理解できるようなものでは無かった。

少年は病院に搬送された。

判ったことはこれで被害者は10人になり、一人の女性が容疑者として浮かび上がったと言うそれだけであった。

事件から五日目。ついに被害者は12人になった。

警察側としてはそれだけでも頭が痛いというのに、現状での最高重要参考人である少年が病院から消えたと言う。

そうして、その日の朝。警察に一人の少年による電話があった。

「郊外にある焼け落ちた廃屋。そこに皆居る」

それだけと言って電話は切れた。疑わしく思いはしたものの、何でもいから進展の欲しかった警察はその場所へと向かった。

そこには元は少年少女達であったのだろうか。散乱した肉群と、元が人間であったのかどうかすら疑わしい、無機質的な朽ち果てた女性体らしい木乃伊が一つ。

ここで何があったのか。犯人は誰であったのか。電話をしてきた少年は誰だったのか。

様々な疑問を残しながらもこうして連続誘拐事件は、連続誘拐殺人事件としてとりあえずの幕を引いた。

———様々な謎と、不快感だけを残し……

最後に何故今までそこに気付けなかったのか疑問は残るものの、被害者達の共通点がわかった。それは、少年と少女は対になっていたということだ。

これが一体何を意味するのか。
こうして疑問が一つ、増えた。

結ばれない欠片

私は幼い頃からひどく臆病でした。

外の世界が怖かったのです。

そんな外の世界で暮らしている人達も怖かった。

違うと言うことが怖かった。同じではないと言うことが苦痛だった。

私の見ている世界と他人の見ている世界。

私の感じている感覚と他人の感じている感覚。

楽しそうに笑い合う会話の環に加わることさえできませんでした。私には判らなかつたのです。他人に合わせるための笑いが。

いっそ空気に、いいえ、植物にでも慣れたらどんなに素敵だろうと思っていました。植物は唯いつもそこにいるだけで、きつとこんな悩みなど持たなくてもいいだろうから。

けれど、私のこの思いはある少女との出会いでがらりと変わりました。

「ね、お話しよ」

ある日のことでした。そう言って私に声をかけてくる少女がいました。優しい、少女でした。笑顔のまぶしい少女でした。

戸惑う私に構わずに彼女はいつも隣にいて、色々なことを話してくれました。

「この花、しってる？」

そう言って彼女が見せてくれたのは透けるような白さの花弁を持つ花でした。私はその花を見て可愛い花。とは思ってもその花のことは知りませんでした。

「これはね、オシロイバナって言うんだ。いろんな色のある花でね、今朝起きたら白いのがこの一輪だけ咲いてたの。可愛いよねえ」

彼女はそう言って愛おしそうにオシロイバナをなでました。

「この子の花言葉は臆病と内気。——貴女と一緒にね」

そう言って私に微笑みかけた彼女に私は、知らず微笑み返していました。

私はいつのまにか彼女が好きになっていました。

彼女との交わりで私は色々なことを知りました。

「違う」ということは「個性」であり、「他人」という存在を「認める」と言うこと。大切なのは「同じであること」ではなく、お互いを「理解し合うこと」なのだ。

私が怖がっていたのは「違う」ということがいづれ「拒絶」に繋がるのではないかと言うことを無意識の内に知っていたから。けれどそれは誰しもがもっているモノ。

だから人は人と繋がらないといけない。個性を認めて、理解しあうことで拒絶は容認に変わり、違うと言う恐怖は認められたと言う安心感に変わる。

彼女は膝を抱えて凍えながら怯えていた私に、手を差し伸べ一筋の、けれど大きな光を与えて照らし暖めてくれました。

彼女との毎日はとても楽しく、新鮮で、愛しいものでした。

——けれど、彼女と私は「違いすぎて」いました

彼女は私のことを好いてくれました。

私も彼女のことが好きでした。

しかし、彼女と私の間には決定的な齟齬があったのです。

私も彼女もそれには気が付いていませんでした。けれど私がそれに気が付くのはそう難しいことではなかったのです。

——狂おしい愛欲の焰が身を灼く苦しみを知りました。

私は、自分ではどうしようもないほどに、彼女を、愛してしまっていたのです。

それでも私はそれが異常なことだと知っていました。この気持ちを彼女に伝えれば、きつともう、彼女とは一緒にいられなくなる。私に――今の私にとってそれは死よりも辛いことです。

私は耐えました。必至に自分に言い聞かせたのです。今のままで良いじゃないか。彼女が隣にいてくれる。ただ、それだけで十分ではないか。と。

けれど私の中の焰はその火力を増すばかり。抑えようとすればするほど、どうしようもなくなっていく。彼女のなにかもが狂おしいほどに愛おしい。嗚呼、彼女を私だけのものにしたい。けれど――……

愛欲の焰を膨らませながら私は彼女との交わりを続けていく。

彼女の笑顔。白い肌。流れる髪。きれいな声。花卉のような唇。優しさ。――ううん。そんなものは些細なもの。私にとって彼女という存在そのものが愛おしいのです。

「大丈夫？ 具合悪そうだけど」

そう言って私の顔をのぞいてくる彼女に、私はなんでもないよと笑顔で返しながら思いました。

――貴女はきつと私のこの想いを想像すらしていないのではありません。と。

ある時、私はついに決心しました。

私は勇気を振り絞って想いの全てを彼女に告白しました。

けれど、私のこの想いは彼女に「拒絶」されました。

そのときの彼女の言葉は優しく、それだけに残酷で辛いものでし

た。

この決定的な違いは到底判り合えないのだと確信しました。

この後の私の記憶はとても曖昧で、けれど、不思議と客観的で鮮明なものでした。

泣きながら逃げる愛しい少女。
それを追う私。

纏れ合うようにして木の床を転がる私と彼女。

彼女に全身で触れていると言う歓喜に震えながら、自らと愛を呪う私。

顔を歪め、泣きながら私に何かを言う彼女。

何を言っているのか判らない。何故泣いているのか判らない。

——— 嗚呼、こんなにも愛しているのにあなたを判ってあげられない。

気が付けばそこは教会でした。

聖母様が見守る中、彼女は、とても冷たくなっていました。

嗚呼、何故こうなってしまったのだろう。

もう私に微笑みかけてくることも、一緒に花を愛でることもできない彼女を前に 私は嘆き悲しみました。

嗚呼、なんで私達は分り合えなかったのだろう。

いつのまにか頬を濡らしていた涙に気付くことなく私は自分を恨みました。

——— 大丈夫。今度こそ、私と貴女は判り合える。結ばれることができる。悠久に、永遠に、一緒にいられる。だから、そのと

きまで、おやすみなさい。
私の、愛しい人……

詩を忘れた詩人

暗い場所。目の前すら見えぬほどの暗さだというのに視ることはでき、感じることもできる。

終焉へと至る場所。どれほどの偉人であろうと、どれほどの犯罪者であろうと、賢者であろうと愚者であろうと。ここでは一切の差別無く扱われる。

果ては同じ。

どこまでも暗いだけのこの場所に、男は揺るがぬ決意を持って訪れた。

男の、もはや異常とも言える意志の強さ故か、それともそれは只の執着でしかないのか……。何れにしろ、男はこの場所ではありえぬモノとして立っている。

たとえこの身が、とは思わない。「この身が果てようと」この考えは愚考だ。身が果てた末に達せられる思いに、如何ほどの意味があるというのか。

届かざる彼岸。叶わざる悲願。

届かざる悲願。叶わざる彼岸。

男は異常な、それだけに純真な曇りない唯一の想いを胸に歩き出す。

———たとえどのような結末になろうとも、それを捻じ曲げてでも。

暗い場所だからだろうか。それとも元からなのか。なんにしろ、男が最初に訪れた河は立ち籠める霧と不気味なまでの暗さでもって男を出迎えた。

その暗さは泳いで渡ろうものならこの世のものとは思いがたいほどの苦しみの果てに死を迎えるだろう……。いや、果たして死ぬ

ことができるのか。仮に死んでもそれで終われるだろうか。そう考えずには、そしてその考えが事実であると判るほどに禍々しい。

男はこの河——いや、大河と形容するほうが正しいだろう——を前に考える。

——どう渡るか。

男の思いは強い。それが故に浅はかで愚かしい真似をとるようなことはない。

男が考えていると霧の向こうから音がする。風も無く波も無いというのにこの音は何の音だろうか。そう考えていると一隻の小船がやってきた。音の正体はこれだったらしい。にしては——。

なんにしろ、男はこれで向こう岸へといけると船に乗り込もうとした。

「待て。お前にはこの船に乗る資格はない」

船へと乗り込もうとする男に、かすれてしわがれた声が言う。

声のするほうを見ると、この船の船頭なのだろう、夜闇のような檻樓いローブで顔は分からないが櫓を手にし髭をたくわえた老人がいた。

男には、老人の資格がないという言葉の意味がちゃんと判っていた。それでも男は老人に乗せてくれないかと頼んだ。私はどうしても向こうへと行きたいのだ、と。

老人はしばし考えると、男のその曇りの無い必死さに一つ提案をした。

「——渡し守をしていると感情が磨耗していくものでな。私は久しく涙を流していないのだ。私の感情を動かすことができたのなら、向こう岸へと運んでやろう……」

男は老人の提案を飲んだ。それ以外に方法は無かったし、男にはどうにかするだけの自信があった。

男は使い込まれた、けれどしっかりとした豎琴を取り出すと詩を謳いだした。

紡がれるは麗しき調べ。謳う声は力強さと切なさを内包し、どこ

までも響いていく。

それはこの老人のためだけの詩。即興だがそれでも感情を動かすに足る詩。

果てなく続く悲しみの環。救いの訪れないことは知りながら、それでも悲しむことをせず、己が役割をこなす者への賛歌。たとえその果てに救いも無く絶望を絶望で塗り固めていくだけだとしても。それでもそれは悲劇ではないと信じ続ける嘘偽りの無い詩。救いは無くても絶望でまみれていても、彼らはあなたに感謝している。それは心の籠った詩。

いつしか男の詩は終わりを迎えた。老人は滂沱と涙を流していた。

「この任に就いて幾星霜。感動とはこれほどのものだったか。ああ、……懐かしい」

老人は男を向こう岸へと連れて行くことを快く引き受けた。

最後に老人はこう言った。

「この感動を忘れたくない。お前さんの豎琴を私に譲ってくれないか？」

男は迷った。この豎琴はとても大切なものだったからだ。けれど、男はそれを譲ってやることにした。たとえ豎琴が無くとも男は詩を謳える。だが、この老人はこれからもずっとここで救いの無い渡し守を続けねばならない。この豎琴で少しでも老人の心が感動を忘れずにいられるのなら、それでいいじゃないか。

豎琴を渡すと老人は

「ありがとう。お前さんが今度来る時は融通を利かせてやろう」

船を下りるとすぐ目の前に巨大な門が見えた。

異様な威圧感と存在感。見るもの全てを絶望へと叩き込む禍々しさ。

男は門を前に怯える心を叱咤し、震える足に力を入れる。

目の前と言っても、男と門の間には100mほどの距離がある。

それでも門には巨大な番がいるということが判った。

黒い姿。燃え盛る炎より、流れ出る鮮血よりアカい瞳。

「……ナにをシにキタ？」

そう声が聞こえた。いや、これは声ではない。頭の中に勝手に無遠慮に無理矢理に響く、目の前の黒い番から私へと向けられ伝えられた意思。

それに声などというものは無かった。だが、男はもし目の前それが声を放つのならこうだろう思った。頭に入ってきた黒い番の意思は男の思った通りの声で響いた。

目の前の黒い番は言った。

「ここハキサマのヨウなヤカラのクルるバシヨではない」

意思には煩わしさが含まれていた。

男は言う。私はこの先にどうして行かねばならない。果したい思いがあるのだ、と。

黒い番は必死に言う男を見、考えるような間を置くところ放った。

「……ソのおもイガまことなうば、ススむことヲとめずニおこウ」

黒い番は進みたければ進めと言う。男はいぶかしみながらも喜んだ。

「――きヲつけろ」

黒い番の方を見るとそこにはもう姿はなかった。

最後に見えた黒い番の姿は、巨大な犬のようにも見えた……。

門は勝手に開いた。番の了承さえ得られれば門が開く仕組みなのだろう。

門をくぐり、中へと足を踏み込むとそこにあっただのは歪で巨大な城だった。門から城へと至る道は石畳。周りを彩るはずの木々はここごとく腐り、朽ち、枯れ、暗澹と荒廃していた。だが、それらは良く見ると秩序正しく、整理された荒廃というなんとも言い難い不気味さを持っていた。

城内には蝋燭で火が灯されていた。青い暗い火だった。歩いているのに足音の響かない回廊。進んでいるという実感の得られないそれは進めば進むほどに不安感を上昇させていく。

数十秒か、数分かはたまた数時間かしてようやく広間に出ることができた。

血のような真っ赤な絨毯。壁際に整列された鎖に繋がれた何か。そして、

「何用だ？」

豪華な椅子に座す男と女。男は肘掛に肘を乗せ気だるげに。女は只そこにいて招かれざる客を見るときも無く見ている。

男は得体の知れない何かに捕らわれそうになる心に気合を入れ、座す男に自らのここまで来た理由と、願いを告げる。

「私は自らの手で想い人を殺めてしまった。そのことに許しを乞うとは思わない。だが、私は本当に心から彼女を愛しているのだ。お願いだ。彼女を生き返らせて欲しい」

「自ら殺めておいて、生き返らせてほしいだと？……知っているぞ。貴様がしてきたことは」

座す男は嘲りと侮蔑をあらわに男に言う。それでも真摯に男は言う。

「それでも、私は彼女を愛している。そのためにはどんなことでもする。お願いだ。どうか――」

男は真剣に懇願する。すると今まで黙っていた女が口を開いた。

「良いではございませんか。この者の思いは真のようです」

座す男にそう言い、続いて男にこう言う。

「けれど、生き返らすことは不可能です。あなたも色々してきたようですが、それが無意味であったことはもう知っているでしょう」

男は何かを言おうとしたが女に制され開きかけた口を閉ざした。

「そこでどうでしょう――」

女はあることを提案した。

その提案を聞き終えたと、男は驚愕した。そんなことができるの

か、と。だが考えてみるとそのほうがよほど現実的なような気がした。

座す男は女を一瞥すると男にこう言った。

「良からう。これでよければ叶えてやる。——貴様としてもこの方が良いだらう。貴様には生き返らせたその後の願いがあるのだらう？　これならば、それも叶う」

男の答えは決まっていた。

「——これが、貴様の狙いか」

誰もいない間で座す男はそう口を開いた。

答える者はおらず、凄烈に笑む気配だけが確かに存在した。

男は選択した。

届かざる彼岸。叶わざる悲願。

届かざる悲願。叶わざる彼岸。

男は夕日に背を向けて歩く。

連れ添う者はおらず、ただ、孤独に。唯一の思いを胸に。

男は夕日に逆らって歩く。

それが彼岸に届き、悲願を叶えると信じて。

男は歩き続ける。狂気にも似た、それ故に純真な唯一の想いを胸に。

——それが、残酷な呪いであるとも知らず……………

……………

……………

……………

檻

石畳を蹴る音がする。

月明かりだけを頼りに走る二つの人影。二人は外套を目深に羽織り、容姿は判らなかつたが、男女であることは判った。二人は建物の影に身を隠すと唇を重ね合わせ、互いの息を潜めた。

慌しく石畳を蹴る幾つもの足音が通り過ぎていく。

完全に遠ざかるのを確認すると、男と女はそつと唇を離した。

幻想的な月明かりの中、男と女は手と手を取り合い通り過ぎた足音とは逆の方向へと走り出した。

男と女は逃げていた。

男と女は愛し合っていた。

男と女の愛は到底許されるものでは無かつた。

身分違いの恋は赦されないと知りながらも二人は惹かれあつた。

伯爵の娘と使用人の男。

それだけでも許されないというのに、娘には親同士が決めたとは言え婚約者がいた。けれど、男と娘は互いに愛し合っていた。しかし、時と階級と言う檻は二人の愛を認めなかつた。認めるはずが無かつた。

だから、娘と男はその狭い檻を蹴って抜け出し逃げている。遠く自由へと。

嗜虐的な貴族趣味から逃げ出し、幻想的な月明かりの下を走る、愛し合う者達。嗚呼、なんと戯曲的なことだろうか。だが、忘れて

はならない。

——戲曲的な逃避行。その果ては退廃を経て背徳へといったり、破滅に辿り着く。これこそが戲曲的な逃避行——恋物語のシナリオであると言うことを。

「娘はまだ見つからんのか！」

豪華な服。彩る装飾品。傲慢な態度。彼こそ娘の父親たる伯爵である。

「早く娘を見つけれ！娘さえ無事ならば男のほうは殺しても構わん！！」

伯爵の怒鳴り声が館に響く。その傲慢な態度と怒気を含んだ声に侍女や執事は焦り、雇われた男達は伯爵を見上げた。

「いいか！早く見つけるのだ！もう時間が無い！！——褒美は幾らでもとらす！！」

伯爵はそう怒鳴ると広間を後にした。硬貨の詰った袋が音を立てた。男達はほくそえんだ。

娘と男はできるだけ暗いところを選びながら走り、港へと辿り着いた。深夜の港には船が幾つかあるが人がいる様子は無い。と、一隻だけ人のいる気配がした。娘は言うにあらず男のほうも船の動かし方を知らないのです、その船の持ち主だと言う男に船を出すよう頼んだ。船主は外套を羽織る二人組みに最初不信そうにしていたが、硬貨を幾枚か握らせると、男は下卑た笑みを浮かべ船を動かすことを快く承諾した。

行き先は遠ければ遠いほどこでもいい。夜の河を一隻の船が泳ぐ。

男達は街中を探し回っていた。世間知らずのお嬢様とたかが使用人の男が一人。そう簡単に遠くまで逃げることはできないだろうと考えていた。

けれど探せど探せど二人は見つからない。

当然だ。運命の女神は恋人達に微笑みこの街から逃がしたのだから。

それと知らず探し続ける男達。だが、見つかるのは時間の問題。

運命の女神が恋人達に微笑むのであれば、破滅の女神は果たして何に微笑むのか……。

街から離れたどこかの森の岸辺。

船主である男は、この先をしばらく行つた所に町があると告げると、街へと戻って行つた。

帰っていく船主に自分達のことを口止めし、上乗せで金貨を数枚渡すと二人は手を取り合い森の中、町を目指し歩き出した。

不気味に鳴く鳥。喧しく騒ぎ立てる虫。たまに吹く風でざわめく木々の枝葉。深夜の森。月明かりすら届かぬそこは娘にとっては全くの異界。手差具ノリの闇の中、明かりすら持たぬ二人は先の見えぬ不安感に苛まれながらも進む。

娘は不安だった。恐怖に苛まれていた。けれど、手を握り隣を歩く男が共にいることを想うとそんなものは全て吹き飛んだ。温室で育つた娘には愛しき人と共にいる唯それだけで世界が希望に溢れて見えた。

男は不安だった。焦りに包まれていた。だが、手を握り隣を歩く娘を想い、それらを押し込める。二人で生きていくと決めたその時から男は娘を何があっても守ると、手放さないと誓った。その誓いに偽りは無い。

「おい。貴様、こんな夜中にどこへ行っていたんだ？」

船主が街へと戻ると運悪く、二人を探している男達に見つかった。船主は硬貨をもらった手前、何とか知らない振りをしようとした。

そんな船主に男たちの中の一人が妙に優しい声音で、だからこそ不安にさせる響きで言った。

「何もアンタに危害を加えようとかなんか思っちゃいないさ。ただな、下賤の輩が伯爵の娘を誑かして連れ去ったのだ。伯爵はそのことにたいそう立腹されている。……知っていることがあるなら、話したほうが身のためだぞ？」

これは貴様のために言っているのだぞ？もし嘘をつこうものならどうなるか想像はつくだろう？男はそう言っているのだ。

船主は脂汗を流しながら頭をめぐらせたが、どうしようもなく、ついに男達に白状した。

所詮は金の上での口約束。脅し同然のことを言われなお白を切り通すなど、無関係と言っているいい船主にはできるはずが無かった。

人間とは赤の他人のために危ない橋を渡ることなどできず、自らの安全を先に考えるのは当然のことなのだ。誰にも船主を責める事など出来やしない。たとえこの結果、使用人の男が殺されることになったとしても。

もうどれくらいの間を歩いただろうか。

歩いても歩いて町は見えてこない。もしかしたら迷ったのかもしれない。船主が言っていたことは嘘なのかもしれない。

月明かりすら届かない暗闇の中。思考までも暗いほうへ暗いほうへと行ってしまふ。

暗闇の中を歩きつづけていると時間の感覚までも狂ってしまうものらしい。ずいぶん歩いたような気もするが、もしかしたらそれほど歩いてないのかもしれない。僅かに見える木々はどれも同じに見

え、同じ場所をグルグルと延々と歩いているように感じる。

男が暗闇の与える精神的疲労からマイナス思考のループに埋没していると、ぎゅ、と手を握られた。見ると娘がニコリと微笑みながら男の両手を握っていた。娘は微笑んでいるが実際は不安でしうがないのだろう。男の手を握る手は震えていた。それでも娘の手から伝わる温もりに、男は顔を上げた。愛しき者が隣にいるということに、二人の不安は確かに遠のいた。

人間は愛しき者、親しき者が隣にいるというだけで希望がもてるものらしい。たとえそれが幻だとしても。

その先で破滅の女神が微笑んでいるのだとしても。

ふいに月明かりが二人を照らす。

男と娘はようやく森を抜けたのだ。二人の顔に笑みが広がる。

しかし、笑みはすぐに硬直し絶望へと染め上げられる。

森を抜けたところで男達が待ち伏せていた。

「今晚は。……さあ、帰りましょうかお嬢様。なに、心配は要りませんよ。帰りの駄賃ならば十分すぎるほど頂いております」

リーダー格らしい男が進み出てそう言う。

男は娘を守るように一歩前に進み出る。それを男達は嘲笑う。

「ああ、けれど彼は」

男達はそれぞれ剣を抜いた。

「——ここでさよなら、だ」

娘を傷つけぬようにという配慮からだろう、銃を使う気配は無い。それでも10人ほどの男達を相手に、男一人で立ち向かうなど、無理な話だ。

それでも男は娘に、大丈夫だから、と優しく言って娘を下がらせ男達と対峙する。

男たちの中から一人が踊り出た。そのまま男に斬りかかる。けれどその男は剣を振り下ろす前に倒れた。夜の静寂を裂く銃声。男の手に握られた拳銃。その拳潤からは煙が出ていた。男は丸腰ではな

かった。丸腰であるわけが無かった。最悪の場合を想定していて当然なのだ。

男達は色めきたった。先ほどの余裕の表情を怒りで染め、一斉に斬りかかる。男の銃が再び火を吹いた。けれど男は銃の扱いに長けているわけではなかった。何発かは当たったがそれで倒れたのは一人だけ。

振り下ろされる剣。それをかわし弾の無くなった拳銃でカウンタ―気味に顔面を殴りつける。何かの折れる嫌な感触が手に伝わってきた。

振り下ろされる剣。腕を切られる。かなり深く斬られたのか傷口から流れ出る血の量が半端ではない。

振り下ろされる剣。それを転がってかわしながら腰からもう一丁の拳銃を抜く。

振り下ろされる剣。それが自分に当たる前に引き金を引く。至近距離で放たれた銃弾は男の眉間を打ち抜いた。

拳銃を向け牽制しながら男は男達から距離を空けた。片腕の感覚がなくなってくる。早く治療をしないとまずいかもしれない。ちらりと隙を見せぬようにして娘のほうを伺う。今にも泣きそうになっている。前に向き直る。容易いと思っていた男に四人もやられたかだろうか、男達は慎重にしている。それでも銃を抜かないところは流石と言える。もしかしたら持ってきていないのかもしれない。それでも油断してはいけない。

拳銃には弾が後五発入っている。残り六人。運良く一人一発で倒せても一人残る。弾切れ拳銃と剣ではどう考えても勝ち目が薄い。「もう諦めろ。お前は良くやった。だがこちらには後六人も残っている。一人でこの数は無理だ。伯爵にはお前は死んだと報告しておいてやる。……娘を渡せ」

命が惜しければ娘を渡して逃げろと言う。そんなことをするくらいなら始めからこんなことはしない。

男は考える。どうすれば良い。後ろは森。この暗さだ。森に逃げ

込めば何とかなるかもしれない。だが、きっと、何れ捕まる。前には男達。男達を全て何とかしてもきつと伯爵は諦めない。同じことの繰り返しになるだけだ。

男が悩んでいると娘が進み出た。何を、というヒマもなく娘が口を開いた。

「私達を見逃してもらえませんか？」

「それは出来ませんよ。お嬢様。伯爵からはすでに前金を頂いておりますし、仲間が四人も殺された」

「お仲間のことは気の毒ですが、先に手を出したのそちらです」

「ま、そうですがね」

「……ここに、家から持ってきたお金が少しですが、あります。これで手を引いてもらえませんか？」

娘は硬貨の詰った袋を男達に見せた。その量はかなりのものであることがわかる。

娘はもう涙を流していなかった。毅然とした態度で男達と交渉する。

「……しかしですね。こちら手ぶらでは帰れないのですよ」

「……でしたら、私達は死んだことにしてください。あなた方がこの人を殺し、私は河に身投げしてこの人の後を追った」

「ふむ……」

「あなた方は河を探したがかなり深いところまでいったらしく見つからなかった。しかし、偶然にも私の身に付けていたネックレスだけは見つかった、と」

そう言って娘は見つけていたネックレスを外した。

「それは？」

「これはお母様から譲っていただいたモノです。これを見せればきっと父も信じるでしょう」

どうですか？と男達はしばし悩むとそれで手を打とうと言った。

俺達は金さえ貰えればそれで良い、と。

「……俺達は貴族って奴等が大嫌いだ。だが、お嬢さん、アンタは

別だ。……精々幸せにな」

リーダー格らしい男は最後にそう言うと、硬貨を三割だけ残して去って行った。三割と言えどそれだけあればこれから二人だけで暮らしていくのに困ることは無い量だ。

男達が去ると娘はべたんと座り込んだ。男が大丈夫かと聞くと、娘は腰が抜けちゃったと微笑んだ。

そうなのだ。温室で育ったと言っても娘は只弱いだけの女性ではない。毅然とした強さももっているのだ。先ほどまで泣いていたのはきっと男が人を殺してしまったからだろう。娘は優しい。手を汚してしまった男の代わりに泣いてくれたのだろう。そう思うのは、自惚れ過ぎだろうか。男はそう思うと苦笑しながら、ありがとうと言った。

それから、数年経った。

娘と男は街から数十キロ離れたある町で静かに暮らしていた。

男は朝から夜まで配達員をし、娘は疲れて帰ってきた男のために家事をこなしながら暮らしていた。娘は最初こそ不慣れな家事に悪戦苦闘していたが、物覚えが良くすぐに上手くなった。

娘は娘を産み母となった。

しかし難産で、娘を産んでまもなく他界した。

男は深い悲しみに暮れたが、娘――いや、女と自分の間に出来た娘を大切にしようとして新たに誓い、娘と二人でそれなりに幸せに暮らしている。

娘は生まれつきの病気もちで体が弱かったがそれでも不幸を感じることは、二人にはなかった。

配達員と言う仕事は何かと情報を耳にしやすい。もしかしたら娘の病気を治す手がかりも手にはいるかと思っていたが、そう簡単に

はいかなかった。

娘は母に似、家事が上手かった。父親たる男が帰ってくるまで家事をこなし、その合間で本を読んで暮らしていた。男は最初娘が家事をするのに反対したが、娘のお願いと医者のおかげでそれくらいの運動はしたほうがいいと言う言葉に、渋々ながらも折れた。

娘と男の至福の時間は夜の語りだった。男の話に娘は興味を持つて聞いていた。

娘は父と母と何時か三人幸せに暮らせると夢見ていた。

———忘れてはならない。運命の女神は幸福の女神ではない。幸福が訪れたらその先に待っているのは破滅。

運命の女神はどこまでも等しく、どちらか片方だけを与えることは無い。

日はいずれ落ち、月が顔を出す。

——嗚呼、もうすぐ破滅の女神が微笑む時間がやってくる。

運命の女神はどんな綻びも見逃さない。

———嗚呼、いつからが始まりなのだろう……

物語はまだ紡がれたばかり……………

少女の夢

ここは夢の中だとすぐに判った。なぜならお家の中ではないから。私は生まれつき体が弱く、病氣持ちだったため外に出た事は無い。おまけにこのごろはずっと雨で、たとえ元氣でもお外を走り回ることなんて出来やしない。

それに、私はお父様が安心して帰ってこれるようにお家のことを色々としなきゃいけない。お母様は私を産んですぐに死んでしまったから……。

そう言えば。最初お父様ったらすごく心配してたな。何かあったらどうするんだって。お掃除やお洗濯、お料理くらいでどうにかなるわけないのに。幾ら体が弱くて病氣もちだからって心配しすぎ。けど、それを疎ましいなんて思わなかった。それだけ私のことを愛してくれてるんだってわかるから。

結局、私が一生懸命お願いして、お医者様にも口添えしてもらってようやくお父様は、あまり無理しちゃダメだよ、って言いながら認めてくれた。

それにしても、不思議な夢。

こんな風に夢だってわかるような夢なんてはじめて。いつもの夢は現実だと思えちゃうくらいなのに。

変な夢。

私はここにいて判るけど、それだけ。ほかに何もない。真っ白。

あれ？

そんな風に思っているとずうっと向こう側に何かある。私は不思議に思いそこに行ってみた。

夢だし、大丈夫だよな？そう思いながら走ってみた。さすが夢。全然大丈夫。嬉しくなると何かがあるとこまで走ってみたけど、走りなれてないからか、すぐに疲れちゃった。変なところで現実的じゃ

なくていいのに。そう不満をもつけど夢に文句を言ってもしかたない。しょうがないから歩くことにした。

“何か”は扉だった。すぐく高価そうな扉。ノブが真鍮だ。恐る恐るノブを捻り、扉を開ける。扉は意外と簡単に開いた。もつと重そうだと思ったのに。

扉を開いた先にあったのは一面の花畑だった。見たことも無いような色とりどり、いろんな形の花達。空にはこのごろずっと見れていない、青空と光り輝く太陽とふんわかとやわらかく浮かぶ雲。

「うわあ……」

思わず感嘆の声が漏れた。

「いつも見てる夢よりもすごいかも」

ここがお父様の言っていた楽園かな？

私の一日の中で一番好きな時間は寝る前にお父様と話す楽園のこと。

私の夢はお父様とお母様、私の三人で楽園で幸せに暮らすこと。お父様は、お母様は楽園にいていつも私たちを見守ってくれていると言っていた。そして、いつかそこで三人で幸せに暮らすんだって。私の見る夢はいつもお父様とお母様と私の三人で楽園で幸せに暮らしている夢。三人で幸せに。私の病気は無くなって元気に走り回る私を、お父様が心配そうに見守って、まだ見ぬお母様がそんな私を少ししたしなめる。私とお母様は二人でお父様に美味しい料理を作ってあげる。お父様は美味しいよって言うってくれて、お母様と私はやったね、って微笑み会う。そんな幸せな夢。それが私の見る夢。

ふわりと風が吹いた。その風に乗って花卉がヒラヒラと舞う。舞って行く花卉のほうを見ると、そこにいつのまにか、あるいは最初からか、女の人が佇んでいた。

「あなたは、誰？」

そう尋ねると、女の方はこちらを見、微笑んで口を開いた。

「大きくなったわね」

「え？」

女の人はそう言うのとゆっくりとこちらに歩み寄ってきた。え？この人は私を知ってるの？何で？私の瞳からは何故だか、涙が流れている。

「良かった。元気に育ってくれて。ずうっと心配だった」

そう言っただけの人は私を抱きしめる。ああ、そうなんだ、きっとこの人が……。

「おかあ、さま……？」

「ええ。そうよ。ごめんね。今まで寂しい思いをさせてしまっただけ。そう答える初めて見る本物の母様は、ぽろぽろと涙を流しながら、ぎゅっ、と私を抱きしめてくれた。私もそんな母様を、ぎゅっ、と抱きかきめ返す。

「おかあさま、おかあさまあ……」

色々お話ししたいことがあるのに、私は幼子のようにおかあさまと泣きながら連呼するだけで。そんな私をお母様は優しく私の名を口にしながら優しく抱いてくれていた。

このお母様は本物だ。私にはそう判った。これは夢の産物じゃなくて、本当に本物の母様だ。お父様に聞いた通りのお母様。私の想像よりもずっと素適なお母様。

「お母様。私ね、色々、たくさんお話ししたいことがあるの」

「そう。私も、あなたのお話を聞きたいわ。是非聞かせて」

お花畑に座り込んで私とお母様は色々なお話をした。

家の家事を私が全部やっていることを言うとお母様は偉いわね、と誉めてくれた。

家の家事をやることをお父様が心配しすぎて反対してきたことを言うとお母様は、しょうがない人ね、と笑った。

お父様がお母様は樂園にいるんだよと話していたと言ったら、じゃあ、ここが樂園かしら、と微笑みながら首を傾げていた。

お父様はお母様のお料理はすごく上手で、世界中の誰よりも上手だったと言っていたと言うと、あの人ったら、と赤くなりながら照れ

くさそうに微笑んだ。

私とお母様で今度一緒に料理をしましょうと言うと、いいわよ、
と言ってくれた。そしてお父様は二人の料理で感動させてやりまし
よう、って。

私とお母様は色々なことをたくさんお話した。今までの時間を取
り戻そうとしているかのように。

母と娘の幸せな時間は続く。

娘にはもはや現実と幻想の区別がついていない。

父が自らのせいで過労死したと深い自責の年に苛まれ、そこに母
の死すらをも自分のせいだと思い込んでしまった娘。

父と母を死なせてしまい、一人だけ取り残されたと思い込んだ娘。
そしてそれを自分に与えられた罰だと思い込んでしまった娘。

いまだ少女と言う年齢の娘にその幻想はあまりに酷く、それを幻
想だと教えてくれる者がいない娘にはそれがいつしか現実となった。
そうして娘はついに崩壊した。体は壊れず、ただただ心が崩れて
いく。

娘は父の骸と談笑し、眠りに就いても荒地を花畑と思い、朽ちた
骸骨を母と思い、話し続ける。

現実とされてしまった娘の幻想。受け入れがたいそれから逃避す
るように、娘の中では父の死は忘れられ、母は夢の中の楽園で暮ら
している。

それらは全てなにもかもが偽りだと娘は気づけない。

いずれ、娘の夢の中の楽園には父も登場するだろう。そこで娘は
両親と幸せに暮らすのだろう。

娘の心は崩れていく。病んでいく。狂っていく。止めてくれる者
はいない。止められる者はいない。

しかし、娘は否応なく知ることになる。残酷な現実を。逃避不可
能な現実を。

破滅の女神は微笑みつづける。
さあ、そろそろ。そろそろだ。
夕日に背を向けた男と、
廻り続ける女と、
狂気に沈んだ娘の———

さあ、まずは娘に教えてやらねば

システイマ

運命というモノがある。

それは全てを絡めとり、逃れることを赦さない秩序・仕組み。

たとえ運命から逃れたとしても、それは別の運命によって決められていたこと。また別の運命から逃れたとしても、また更に運命はその者を囚える。どこまでその枠を広げようと簡単に絡めとられる――いや、一時として逃れることなど出来ないのだ。幾重にもなる糸から逃げることなど出来やしない。

たとえ、歪めようとも。

女は自らの運命を変えようと男になった。そうして唯一愛した女性を永遠のモノとするため、終焉と言う運命を塗り替えた。

自らは沈まぬ陽となって。

女を永遠に廻りつづける月として。

嗚呼、だが男は気づけない。陽と月が逢ったとしてもそれは刹那の出来事。永遠であることなど叶わない。出会いと別れは等しく訪れ。男は一人、其処で女がやってくるのを待つしかない。嗚呼、この出会いと別れのみが永遠と言えるかもしれない。

男と女は常に惹かれあう。だが、女は永の廻りの中で男のことを忘れていく。男もまた、正しく覚えているわけがない。

そして、それも残酷な運命によって定められていた運命。舞台上でのシナリオの変更は認められない。

底は滑稽な遊技盤。盤の上をコマが進む。代わる代わるコマは進む。
む。

さあ、男の手番。男は変わる変わる時の中をただ、立ち尽くす。

さあ、女の手番。女は男に引き寄せられる。
さあ、男の手番。男は女と共に歩もうとする。されど、殺し殺され。
れ。

さあ、女の手番。女は男と共に歩む。されど、殺し殺され。
変わらぬ遊戯。続く続く。

飽くことなく紡がれつつける運命。
糸がほつれた――。

沈まぬ男と廻る女に変化。

戯曲的な逃走劇の果てに女は男との間に子を身籠った。
それは今までになかったこと。
変わるはずのない運命。

―――ついに運命は変わったのか。
子を産むと女は死んだ。

やはり変わるぬ運命。男は結果的に女を殺した。そして女は沈む。
立ち尽くすのみの男。――しかし、其処には娘。男に変化が――
しかし運命は変わらない。

男は娘の元を離れ、男と女は惹かれあう。
残された娘。

新しい運命。

愛した人を失い壊れた少女。
少女の崩壊は止まず、崩壊した少女の愛は病んでいく。

夕日に逆らった男。

巡りつづける女。

——其処には少女の影。

滑稽な遊技場。哀れなコマ。

運命と言う秩序・仕組み。

遊技場の上では今日もコマが進む。

運命に従って——

さあ、アナタの手番。

この愉快的な遊戯は終わらない。

システイマ（後書き）

さあ、皆さんが観測可能なこのファンタジーは終わりです。どうです？ 気付けましたか？ 気付けませんでしたか？

物語とは本来、“終わることなど無いもの”なのです。思い浮かべてください。例えば、不思議の国のアリス。ほんとうに、あれで終わりだと思いますか？ いいえ。アリスという少女の物語はあれで終わるはずが無いのです。これも同じです。物語は終わりません。――万物は、流転するが定め。それは閉じた輪。もしかしたら、いつかこの物語を再び観測することができる日がくるかもしれません。来ないかもしれませんが。ただ、言えるのは、何度でもいいですが、物語は終わらないのです。それだけです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1550b/>

S t o r y

2010年10月8日15時51分発行